



美唄三師会総会

1月21日(金)「ホテルスエヒロ」において、美唄三師会総会が行われました。

三師会は医師・歯科医師・薬剤師からなり、新年には総会、秋にはゴルフコンペを行い相互の親睦を図っています。総会では各師会の持ち回りで講演会が毎年開催されます。

今年は歯科医師会が当番のため、口腔の身体における重要性を皆さんにご理解いただくために、歯科に関するものとして咀嚼・嚥下を中心に講演をしていただくこととなりました。講師には岩見沢歯科衛生士会会長で医療法人柏葉会三嶋歯科医院の衛生士宮腰ゆき子先生をお招きし「活き活き口腔ケア」と題しまして講演をしていただきました。

先生は口から食べること、お話することそして口腔清掃の重要性についてお話し下さいました。その中では、豊富な経験をもとに、口腔ケアの必要性またその効果について説明されました。スライドを使っていろいろな症例を報告していただき、介護を受ける前の患者さんの表情と、ある程度口腔ケアが進んだ時の表情の違いは印象的でした。まさに「活き活き」としたものを実感させられま



した。

講演の後半は実際にグミゼリーを使った咀嚼・嚥下時の食塊の認識体験や介護される身になったときの水の飲ませ方による感覚の違いなど実感できるものでした。

最後に舌・口腔周囲筋などの訓練のための「笑顔体操」を全員で行い、講演は医師・薬剤師の諸先生方にも大変有意義な内容となっております。

一生懸命ご講演いただいた宮腰さんはもとより、ご協力いただいた三嶋岩歯会会長にも感謝申し上げます。

(高橋典弘記)

伊豆地方は彼岸桜が満開というが

立春がすぎて日没が随分と遅くなったことに皆が気がつく今日このごろ。人びとは、そこはかかない春の気配を感じる。かすかながらも春はうごけり、とでもいうところかも。

冬が春に移る時期に、日本海を強い低気圧が通る時に吹く暖かい南寄りの強い風のことを、昔から春一番と呼んでいる。通常立春すぎの最初の強い南風のことで、そのころになるとシベリア高気圧の勢力が弱まって、低気圧が日本海で発達しやすくなるからだといわれている。後退する冬将軍と前進する春の女神の初めての出会い、季節の変化の自然の陣痛ともいうべきか。春を呼ぶ使者ともいわれるが、北海道ではむしろ春一番の荒天として用心したほうが多い場合が多い。

過去半世紀の統計では、春一番は1日2日の荒れで低気圧の通過後、必ず寒波の戻りがあり、その後の天候は周期的に変わるが、そのまま春本番に移行したり、真冬なみの大寒波を呼び込み、冬将軍が居すわったりのこともあるが、その確率は30%と少ないという。春一番の最も早い記録は異常暖冬の昭和24年1月25日で、これは寒中のバカ陽気とも呼ぶもの。3月の遅い春一番は2月が寒冬年であることが多い。春一番が不発の年は春の

天候が不順のことが多いといわれる。2月に限れば過去19例の平均出現日は15日とのことであるという。北海道では春一番の大惨事としては、昭和44年2月6日に江別市郊外の国道で、数百台の自動車が立ち往生し、2千人近くが一昼夜にわたって孤立し道内の各地で船舶沈没25隻死者32名という、春一番としては空前の大惨事として忘れることができない。車の数が倍増している今日ならと思うと眼の前が真っ暗になってしまう。この原稿が活字になる頃には今年の春一番は吹いたあとと思うが、お手やわらかに吹いてもらいたいと祈念して止まない。

(雨田 実記)